

令和7年度 地域を志向した研究 成果報告書

テーマ		看護学生と地域在住高齢者の交流に焦点をあてたフレイル予防			
研究組織者	代表者	所属・職	看護学部・講師	氏名	管原 清子
	連携研究者	所属・職	氏名	所属・職	氏名
		看護学部・准教授	加藤 京里	看護学部・助教	三沢 萌伽
		看護学部・准教授	廣瀬 允美	看護学部・非常勤	萩原 彩乃
		看護学部・講師	加納 江理	浜松医科大学医学部・教授	永谷 幸子
研究者	看護学部・助教	小原 陽子			
研究の目的、内容、方法、研究成果、今後の課題等	<p>【目的】静岡県在住高齢者のフレイルの実態を調査するとともに、看護学生と高齢者の世代間交流に焦点をあてたフレイル予防の効果を検証することを目的とした。</p> <p>【方法】地域在住高齢者を対象にフレイル予防講習会および測定会を実施した。講習会では看護学生が主体となり、フレイル予防に関する講義や運動指導を行い、参加者との積極的な交流を図った。さらに、握力、歩行速度、下腿周囲径、骨密度の測定を行い、身体的フレイルの評価を行った世代間交流の効果は、参加者のアンケートから評価した。</p> <p>【結果】参加者は32名（男性8名、女性24名、平均年齢76.8歳）であった。アンケートでは、学生による講義および交流に対して「満足」「やや満足」が大半を占め、否定的評価はほとんど認められなかった。また自由記載においても、「若い世代との交流により安心感や活力を得られた」「楽しく有意義な時間であった」などの意見が多く、学生との交流が心理的側面に肯定的な影響を与えたことが示唆された。</p> <p>身体的フレイルの評価では、フレイル1名（3.6%）、プレフレイル8名（28.6%）、健康19名（67.9%）であった。各測定項目では、握力低下者が3名、下腿周囲径の基準以下が13名認められた一方、歩行速度の低下者は認められなかった。骨密度は「十分多い」9名、「普通」10名、「少なめ注意」9名であった。これらの結果から、見かけ上は健康であっても潜在的にフレイルリスクを有する高齢者が一定数存在することが明らかとなった。</p> <p>【結論】看護学生との世代間交流は高齢者の社会的つながりを促進し、社会的フレイル予防に寄与する可能性が示唆された。今後の課題として、対象者数の拡大や継続的介入による効果検証、身体的・精神的・社会的側面を統合した包括的評価の実施が求められる。</p>				

※別途研究成果資料を添付する。

令和 8年 3月 19日提出